

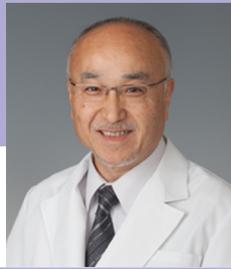
神奈川県立がんセンター広報誌 Vol.54

がんセンターたより

ごあいさつ

総長 赤池 信

Makoto Akaike



この4月1日をもって神奈川県立がんセンター総長を拝命し、職責の重さを全身で感じながらこの1ヶ月を務めてきました。がんセンターが発展し、職員が今以上に誇れる施設となるように皆さんと一緒に行動したいと思っておりますのでよろしくお願い致します。

平成25年度における一大イベントはなんとと言っても新病院への移転、開院です。計画から6年がかりでここまでできましたが、この機会に立ち会える私たちの前には一緒に働いた多くの同僚の努力が存在しています。計画の立案から、他施設の調査、計画変更、調整、交渉などかなりの労力を費やしなが、思うようにならない環境の中で、少しでも理念を達成すべく、皆で協力して現病院を支えてきました。11月の開院の際には前任者の方たちとともに喜びを分かち合いたいと思います。一方、新病院での職務は全県民の人たちに見られていると思わなければならないでしょう。がんセンターは、県のがん治療の中核機関としての責務を果たしてきたと自負しているところですが、周囲の期待はいつもそれ以上と感じられてきました。そのような中での新病院開院でありますし、さらに、重粒子線治療施設の建設に関しても注目を集めているところですので、患者さんやご家族だけでなく、一般の人や周囲医療機関、行政など、多方面からとても多くのことを期待され、多くの成果を求められていることとなります。結果を示すためには、職員全員が同じ目標に向かい達成する覚悟が必要で、とても大変なことと思われるかも知れませんが、私たちががんセンター職員の能力を持って当たれば、可能と思っています。新しい施設で、楽しく、気持ちよく、笑顔で仕事をする事ができれば、自ずと結果は付いてくると私は信じています。昨年度の当施設の診療、研究、教育の実績については、まだ確定結果は示されていませんが例年以上であろうと予想されます。特に診療上での実績はそのまま経営指標に反映されており、過去にないほどの成果を示して

います。ひとえに職員ひとりひとりがその能力を十分に発揮した結果であり、新病院ではさらに発展していくと想像します。

私達には、病院の理念と基本方針があります。これらを達成するために組織があり、その組織を職員が構成していることは言うまでもありませんが、構成員の資質が組織の資質である以上、私達はさらに上を目指そうではありませんか。医療の中では未だにチーム医療という言葉が多く語られていますが、他の領域でははるか以前より当然のこととして行われていることです。医療従事者の偏った考え方や感じ方がその実行を妨げているとしか思えませんし、ことさらチーム医療などという言葉を使用しなくても良い環境が必要なのではないでしょうか。全ての職種において自信に裏付けされた謙虚さで医療に携わっていくことができればと思います。

今年、県立成人病センター設立以来50周年、がんセンターとして27年目を迎えました。今後の活動を考えれば、今以上に伝統あるがんセンターと言って誇れる時期が必ず来ると推測されます。伝統には、文化の中では、変えてはいけない本質と、それを保証するために絶えず革新していかなければならない部分があり、その結果として現在まで生命力を保つことが出来たものが伝統と言われます。私達の目指しているものはまさしくこのことだと思っています。仕事は夢であり夢のためでもある、少しでも吸収したいと思っているから面白い、このような思いで、明るく、元気に、素直に、これからも、奮ることなく、停滞することなく、全員で考え行動していきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。



就任の ごあいさつ

病院長
本村 茂樹

Shigeki Motomura



平成 25 年 4 月 1 日付けで病院長に就任しました。今まで 3 年間副院長をしてきましたが、この間、患者さんからのいろいろなクレームを聞き、患者さんと職員、または職員同士のトラブルをいくつも見てきました。その原因を考えると、一つは医師の接遇の悪さであったり、医師を含めた職員の気配りのなさであったり、医療事故に関してはお互いのコミュニケーション不足であったりしました。「仕事をしに来て、嫌な気持ちで帰る」、こんな理不尽なことはありません。医師、看護師、技師、薬剤師、管理栄養士、またはその他のスタッフが、お互いに少しの気配りを示し、「気持ちよく仕事が出来る病院」を作りたいと考えています。皆さん御協力下さい。

私は昭和 58 年、神奈川県立成人病センター時代に初代無菌病室を作り、一度赴任しました。その時に出来たのが A 棟で、昭和 59 年 11 月から使用しています。しかし、その後、新たな病棟や外来などの新設はなく、病院は次第に老朽化しました。平成 18 年、総合整備推進室が設置され、新病院の建設計画が始まりました。4 月現在、新病院の外観は出来ており、本年 11 月 2 日には新病院へ移ります。新しい病院は、入院患者さんに配慮した広い病室、外来患者さんのプライバシーを考えた診察室があり、入退院・検査予約・相談などを一元化した患者支援センターなど新たな試みが幾つもあります。私達にとっても心機一転となるでしょう。

病院経営に関して、新病院は PFI (Private Finance Initiative) 方式という民間の資金、経営能力および技術的能力を活用しようというもので、大林組、ニチイ学館を中心とする SPC (Special Purpose Company) が病院の維持管理、運営業務委託を行うことになっています。但し、病院建設に費用を掛けなかった分、今後の維持管理、運営業務委託にはかなり費用が掛かります。今後も病院経営をする上で、DPC 係数の活用と取れる加算を徹底すること、増床した手術室の有効運用と HCU の戻

りベッドは使用すること、などを中心に、「如何にベッドを有効活用するか」が大命題となります。職員全員で経営を考え、仕事をすることが必要です。是非、御協力下さい。

副院長兼消化器内科部長
大川 伸一

Shinichi Ohkawa



こんにちは。この 4 月から副院長職に就きました大川です。3 月までは、肝胆膵の悪性腫瘍の診断と内科的治療を生業としておりました。

私はバブル時代の末期である平成元年の 6 月に当がんセンターに赴任し、以後現在まで約 24 年間勤務しております。赴任した頃は今と比べて患者さんは少なく、肝胆膵内科の平均在院日数は一ヶ月以上もあるような時代でした(今は 9 日)。昼休みは結構十分取れましたし、研究活動は別として診療業務だけならば、感覚的には現在の半分くらいしか働いていなかったのではないかと思います。

その頃は世の中も個人情報観念はそれほど厳しくなく、のんびりした時代であったと思います。

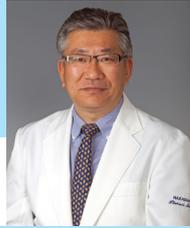
しかし医療を取り巻く環境は急速に厳しくなりました。この 20 年で医療の水準は多方面で大きく上がりましたが、逆に医学が進歩すればするほど、結果が期待通りにいかなかった時に必要以上に責められてしまうことがしばしば生じます。また国や自治体の負債が膨らみ、平行して病院経営も厳しい時代になっています。私が医師になった頃は、経営的なことがらを口に出すと、先輩から「医者は経営のことなんか考えるんじゃない」とよく怒られたものです。

時代は変わり、医師も診療や研究はもちろんですが、それ以外の多くのことを一人一人が問われる状況となってきました。医療安全に常に気を配るのももちろんですが、若手の医師であっても日頃から経営的感覚を身につけるべきであろうと思います。確かに財政難で病院運営がたち行かなくなれば、期待される医療の提供が出来なくなるわけですから社会に対する裏切りになると言えるでしょう。

当院は、がん診療の研究施設であります。治療法、診断法の進歩のために多くの治験や臨床試験を為していくことは社会的使命であります。また、たくさんの患者さんが訪れてくださることにより、若い医師が豊富な経験を積むことが可能です。教育病院としての使命を果たすために、必要に応じて体制の改訂、新たな構築を行っていくことも重要です。

さあ、この 11 月には新しい病院での診療が始まります。みなさんがまた新たな希望に向かって業務に励まれることを願って止みません。

副院長（総合整備担当）
兼呼吸器外科部長
中山 治彦



Haruhiko Nakayama

みなさんこんにちは。平成25年4月付で副院長（総合整備担当）を拝命しました中山治彦です。

“失われた20年”と称された不況からようやく脱却できるのではと期待が膨らみつつあるこの時期に、いよいよ新がんセンターが船出します。私が当センターに赴任してから14年の歳月が経ちました。この間自分の専門とする肺がんの治療はずいぶん様変わりしました。赴任当時は、科の名称は数字で呼ばれていましたが（呼吸器外科は食道外科と一緒に外科1科）その後患者中心の医療・わかりやすい診療への流れで、各診療科は臓器別へと名称が変わりました。主治医がすべてを担った時代からチーム医療、多職種チーム医療へと診療体制も変わりつつあります。さらにDPCやクリニカルパスと言った医療の可視化、専門認定看護師やICT、NSTなどの専門サポートチームの充実、地域医療連携の拡充など、診療を取り巻く環境も大きく変化しました。がんに関する情報（なかには怪しげな情報もあるが）も巷に溢れています。医療を提供する側も受ける側も、以前とは比較にならないほどの多種多様な環境の中にいます。

新病院のハード面は刻々と変化する医療環境にも可能なかぎり対応できるよう整備されています。新病院ではこのハードを最大限活用し病院の機能を高めることが求められています。ハードを活かすのはひとりの力、つまりこの病院で働くみなさんの力です。現職は新病院と重粒子線治療施設の整備ですが、職員のみなさんが有機的、横断的に連携し組織の質を高めていけるような環境の整備にも尽くしたいと思います。力を合わせて素晴らしい病院を築き上げていきましょう！

副院長兼看護局長
渡邊 眞理



Mari Watanabe

皆さんこんにちは。平成25年4月から副院長兼看護局長に就任しました渡邊眞理です。

私は当院が地方独立行政法人化した平成22年4月に、それまでの医療相談支援室長（副看護局長）から看護局長に就任し、看護局長として4年目になります。また私は平成15年にがん看護専門看護師の資格を取得し、患者さん・ご家族の直接的なケアや、がん看護に携わる看護師の支援を通して、がん看護実践の質の向上を目指してきました。管理者になった現在は、このことを強みとして生かしていきたいと思っています。

当院の看護師の数は360名（平成25年4月現在）の常勤看護師の他、様々な勤務形態の看護師が約35名勤務しています。病棟や外来だけでなく、医療安全部門、相談部門、臨床研究所、治験管理室等、看護師の勤務する部署が多くあります。いずれも患者さんやご家族が安心してがん医療が受けられるよう、最も身近な立場の医療者として看護をさせていただいています。

当看護局では「がんと共に今を生きる患者さんに寄り添い、その人らしさを大切にしたい」ということをミッションとしています。看護師は医療処置などの診療の補助行為だけでなく、患者さんやご家族の心理的支援、治療法や療養の場の意思決定支援、多くの職種の調整役を行っています。がん医療を提供する中で生活をしている患者さんお一人おひとりにあった看護をしていくことを大切にしていきたいです。

平成25年度の看護局目標は以下の通りです。

1. 新病院への移転に当たり、細心の準備を整え、安全・安心な医療を継続します。
2. 働きやすい職場環境を整備し、看護師確保・定着を推進します。
3. 質の高いケアを提供するための組織化を図り、チーム医療を推進します。
4. 多くの患者さんへ適切な医療を提供するために、円滑なベッド運用・地域医療連携を強化します。

この目標を達成するために職員全員で取り組んでいきたいと思っています。

この度、副院長という新たな役割を拝命しました。日本の看護職副院長は1987年に初めて登場しました。看護管理と、病院全体の運営また都道府県がん診療連携拠点病院としての機能の充実も図ってまいります。そして患者さん・ご家族に選ばれる病院を目指していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

企画情報部長
兼血液内科部長
金森 平和



Heiwa Kanamori

本年4月より野田和正部長の後任として企画情報部長に就任いたしました。企画情報部の紹介をしながら就任の挨拶をさせていただきます。

企画情報部は教育研修室と企画調査室からなっており、主な業務として前者はレジデント制度と外部からの研修の受け入れ（看護師を除く）を担当し、後者は院内がん登録、診療録管理、図書室運営、広報、各種講習会・講演会の企画、地域および都道府県がん診療連携拠点病院（以下「拠点病院」と略）に関わる業務全般を担当しています。

企画情報部の業務は多岐にわたっているため、「何を

しているところですか？」とよく聞かれます。市立病院であれば良性疾患も多く診療しているのがん患者の診療は病院機能としては部分的要素になり、拠点病院としての意味合いもがん診療のみに限定されます。一方、当がんセンターでは、診療すべてががん診療に関わっていますので、「拠点病院として指定されている＝病院全体の質が評価され、その機能を果たさなければならぬ」ということとなります。全国どこでも質の高いがん医療を提供することを目的として、平成13年より拠点病院をすべての二次医療圏（日常生活圏域レベル）に整備することを目指した結果、現在397の医療機関が国からの指定を受けています。さらに、各都道府県のがん診療機能の中心的役割を担う病院として、拠点病院のうち51の医療機関が都道府県拠点病院として指定され、当センターも神奈川県を代表する拠点病院（平成19年1月）になっています。従って、院内のすべての部門でその責務を認識し、よりよいがん診療を充実させるための努力が必要になります。一人一人の患者さんに満足していただける診療を提供することが病院全体の評価につながることは言うまでもありませんが、病院組織として各部門が有機的に連携することが病院発展のためには欠かせません。全職員の協力によって指定された都道府県拠点病院ですが、今後も厳しい見直しがあり、現状維持だけでは指定から外される可能性もあります。11月に新病院が開かれることを機に、改めて全職員に当センターの果たすべき役割を確認していただくとともに、企画情報部では情報を収集し、拠点病院としての機能を果たすために必要な企画・情報を院内・院外に向けて発信したいと考えております。皆さんにはお願いすることも多くありますが、がん診療を取り巻く背景をご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

医療技術部長
兼呼吸器内科部長
山田 耕三

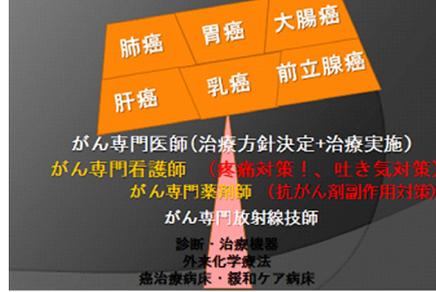


Kouzo Yamada

4月1日より医療技術部長兼呼吸器内科部長に就任いたしました。

『医療技術部とは何をするところ？』こういうご質問が必ずや出やすい部門であり、私自身もまだまだ理解していない部分もあります。この答えは、県立がんセンターの組織概要をぜひ参照いただければわかります。すなわち、その組織とは事務部門、病院部門、臨床研究所と大きく3部門があります。病院はさらに、企画情報部、総合整備推進部、医療評価安全部、医療局そして我が医療技術部と看護局に別れ、医療技術部はその先さらに放射線診断技術科、放射線治療技術科、検査科、栄養管理科、薬剤科、医療技術科と配されています。したがって、医療技術部は直接医師である私が関わる領域

がん専門病院のチーム医療とは？



ではありませんが、がん専門病院のチーム医療を支えている基本の骨格をなす組織という過言ではないと思います。

くわしくは、上の図を参照していただければ一目瞭然と思います。今や「がん専門病院」は医師や看護師のみの“力”では動くことができません。もちろん「がん医療」の骨幹をなすのは、がん専門医とがん専門看護師ですが、そこにがん専門薬剤師、がん専門放射線技師、またいろんな機器を動かす医療技術科、患者の栄養指導やサポート、血液検体や病理組織を扱う検査部門が一体となり、チーム医療をかたち作っているのです。

今年の11月には新棟移転を控えて、新しいがんセンターの体制作りが急がれています。今後の新がんセンターでの『がん専門病院の力を120%発揮する！』ためになすべきチーム医療の確立、『事故を起こさないための安全を前面に出した病院づくり！』のためになすべき環境作り、医療技術部が病院の根幹を支えていく基礎的な仕事をしていく必要があります。そのために多少なりとも私の力が発揮できるように努力したいと考えております。各部門の部長や技師長などと、世界一のがんセンターを作るために汗をかきたいと思いますので、何卒よろしくお願いたします。

副看護局長
曾我 孝子



Takako Soga

4月1日より副看護局長に就任いたしました曾我です。私は平成17年4月より、がんセンターに赴任し現在、入院患者さんのベッド調整、新棟の移転準備を中心に担当しています。新棟移転は新たながんセンターの出発となります。諸先輩方が培われたがんセンターを礎に、看護局のミッションである「がんと共に今を生きる患者さんに寄り添い、その人らしさを大切にしたい最良の看護」の提供と、安心・安全な医療（看護）に取り組んでいきます。新棟では患者さんの1ベッド当たりの面積が今より広くなり、個室数も増えます。無菌病棟・緩和ケア病棟、手術室、外来化学療法室の増床、放射線治療（リニアック・重粒子線治療等）も充実し、癌のどの病期においても必要な医療（看護）が提供できるよう計画しています。私たちの夢を叶えるために、多くの職員と助け合い努力を積み重ねつなぎ合わせ成果として形になるよう努めてまいります。どうぞ宜しくお願い致します。

平成25年度 がん臨床講座

神奈川県立がんセンターでは、昨年度に引き続き「がん臨床講座」を毎週水曜日に開講しています。医療スタッフ、近隣の医師、薬剤師の方々、職種は問いません。興味のある内容の日にはお気軽にご参加ください。なお、参加をご希望される場合は、事前にご連絡ください。

開講日 毎週水曜日 18時30分～19時30分
 会場 神奈川県立がんセンター
 管理医局棟3階総合診断室
 連絡および問い合わせ先
 神奈川県立がんセンター 企画調査室
 電話 045-391-5761 (内線2510)

平成25年度 神奈川県立がんセンター がん臨床講座 予定表
 (毎週水曜日18:30-19:30 管理医局棟3階総合診断室)

日付	曜日	演題名	所属	講師名 (敬称略)
平成25年				
4月 17日	水	病理診断のABC	病理診断科	横瀬 智之
24日	水	放射線治療論	放射線腫瘍科	中山 優子
5月 8日	水	がん化学療法の基本理論	病院長	本村 茂樹
15日	水	原発不明癌	腫瘍内科	高崎 啓孝
22日	水	肺がんの外科治療	呼吸器外科	伊藤 宏之
29日	水	臨床研究所 (題未定)	臨床研究所	宮城 洋平
6月 5日	水	悪性リンパ腫	腫瘍内科	酒井 リカ
12日	水	白血病	血液内科	金森 平和
19日	水	肝臓がん	消化器内科	森本 学
26日	水	頭頸部がん	頭頸部外科	古川 まどか
7月 3日	水	non-coding RNA	臨床研究所	大津 敬
10日	水	胃がんのESD	消化器内科	井口 靖弘
夏期休暇				
9月 11日	水	肺がん・診断～治療論	呼吸器外科	山田 耕三
18日	水	肺がん治療	呼吸器外科	尾下 文浩
25日	水	大腸がん	消化器外科	塩澤 学
10月 2日	水	疫学	臨床研究所	片山 佳代子
9日	水	骨軟部腫瘍	骨軟部腫瘍外科	竹山 昌伸
16日	水	皮膚科	皮膚科	稲川 紀章
日本癌治療学会 新編集				
11月 13日	水	腎がん	泌尿器科	岸田 健
20日	水	胆膵がん	消化器内科	上野 誠
27日	水	子宮頸がん	婦人科	加藤 久盛
12月 4日	水	卵巣がん	婦人科	小野瀬 亮
11日	水	脳腫瘍	脳神経外科	林 明宗
18日	水	胃がん	消化器内科	中山 昇典
冬期休暇				
平成26年				
1月 15日	水	緩和ケア	緩和ケア内科	太田 周平
22日	水	甲状腺未分化がん	乳腺内分泌科	吉田 明
29日	水	放射線診断	放射線診断科	永田 延工
2月 5日	水	食管がん	消化器外科	尾形 高士
12日	水	前立腺がん	泌尿器科	林岡 研太郎
19日	水	乳がん	乳腺内分泌科	清水 哲
26日	水	循環器	循環器内科	上野 淳
3月 5日	水	薬剤科	薬剤科	
12日	水	予備日		
19日	水	予備日		
25年度 疫学、原発不明癌 若干変更されることがあることをご承知ください。 以下の講演は平成26年度以降とします。				
基礎編: psycho-oncology 1講義、第I・II・III種臨床検定講義				
臨床編: 小児腫瘍 1講義				



平成23年7月に着工した新がんセンターの建設工事も順調に進んでおり、平成25年11月の開院まで、約5ヶ月となりました。そこで、今後の予定などについて改めてご紹介いたします。

現在、建物周囲の足場が外れ、外壁が全て見えるようになりました。内部はまだ工事中ですが、フロアによっては天井や壁紙が貼られていたり、照明器具が設置されたりと、整えられてきています。



建築現場全景写真

今後の予定は、

- 病院施設建築工事：～平成25年8月1日
- 開院準備：平成25年8月1日
～平成25年11月1日
- 引越し：平成25年11月2日
- 外来診療開始：平成25年11月5日

となっています。5月の連休明けからは新しく設置するリニアックなどの医療機器の設置も始まりました。これからは建築も終盤に入り、外構や植栽などの建物以外の部分の整備も進みます。また、保健所や消防が実施する開院に必要な検査等も多数行われます。8月からの開院準備期間中は、必要な器材や備品の搬入、スムーズに診療を始めるためのリハーサル等が行われます。

同じ敷地内で、平成27年12月治療開始予定の重粒子線治療施設(i-ROCK)の建設工事も進んでいます。新しいがんセンターでも、患者さんに優しく質の高い医療を提供できるよう、取り組んでまいります。(新がんセンター総合整備室)

新任の紹介



4月1日付で職員の異動がありましたのでご紹介します。

紙面の都合上、採用・就任された幹部職員、医師、放射線科診断技術科長、薬剤部長、看護科長の紹介に限らせていただきました。

どうぞよろしくお願いいたします。

幹部職員



総長
赤池 信



病院長
本村 茂樹



副院長
大川 伸一



副院長
中山 治彦



副院長
兼看護局長
渡邊 眞理



企画情報部長兼
血液内科部長兼
輸血医療科部長
金森 平和



医療技術部長兼
呼吸器内科部長
山田 耕三



副看護局長
曾我 孝子



副事務局長
兼総務課長
横井 茂



医事課長
吉原 由紀子

医療局 (医師)



消化器内科
部長
森本 学



婦人科
部長
加藤 久盛



呼吸器外科
部長
伊藤 宏之



泌尿器科
部長
岸田 健



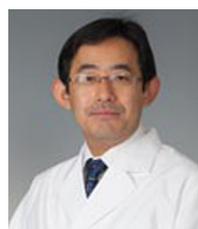
乳腺内分泌外科
医長
吉田 達也



乳腺内分泌外科
医長
山中 隆司



呼吸器内科
医長
村上 修司



呼吸器外科
医長
西井 鉄平



消化器外科
医長
樋口 晃生



婦人科
医長
横田 奈朋



腫瘍内科
医師
服部 友歌子



消化器内科
医師
井上 俊太郎



消化器内科
医師
入江 邦泰



脳神経外科
医師
池谷 直樹



消化器外科
医師
幕内 洋介



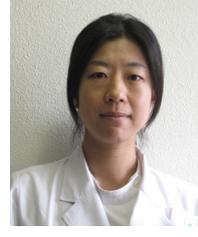
泌尿器科
医師
水野 伸彦



消化器内科
医師
工藤 香菜



消化器内科
医師
合田 賢弘



乳腺内分泌外科
医師
西山 幸子



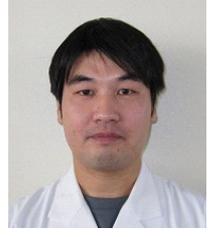
乳腺内分泌外科
医師
嘉数 彩乃



消化器外科
医師
川邊 泰一



病理診断科
医師
鷲見 公太



病理診断科
医師
野口 映



放射線診断技術科
科長
野川 義昭



放射線治療技術科
部長
坂田 幸三



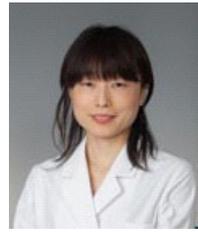
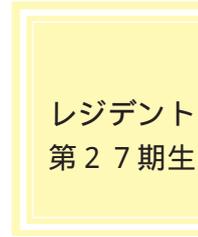
薬剤科
部長
楠原 義宏



看護科長
齊木 由紀子



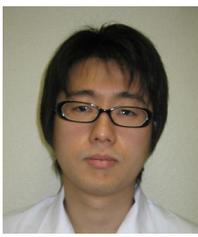
看護科長
市橋 麻由美



医師
狩野 芙美



医師
伊坂 哲哉



医師
亀田 亮



医師
中園 綾乃



医師
小野 響子



医師
浅利 昌大



50th anniversary

神奈川県立がんセンター
創立 50 周年記念パーティー

総長 赤池 信

平成 25 年 2 月 14 日、横浜ロイヤルパークホテルにて神奈川県立がんセンター創立 50 周年記念パーティーを開催致しました。

出席者数は約 370 名にのぼり予想をはるかに越えた大規模なパーティーになりました。小林前総長の発案で 1 年前から準備(?)をしてきましたが、当初は県立成人病センター、がんセンターからの OB と現職のみで同窓会のように行うことを考えておりました。計画の途中で、50 年は半世紀、盛大に行うべしとの先輩の声もあり、医師会、看護協会、連携医療機関の方や関連大学などにもご案内した結果、かくも盛大に行うことができました。

ご挨拶いただきたい方々が多かったために歓談、食事の挨拶になり、話す方々には申し訳なく、また、聞きづらい感じにもなってしまいましたが、一方で、堅苦しくなく和やかに旧知の人と過ごせることができたのご意見もいただき、幹事としてはほっとしているところです。

「がんへの挑戦のしるべ」として刊行された 50 周年記念誌には、全部門での将来への希望と決意が記されています。新病院で、それらを実現する気持ちになる出発点としてのパーティーにもなったのではないかと幹事一同自賛しております。

また、同会で、元検査科技師長 柴山 茂氏と元放射線技師長 相川 芳弘氏が瑞宝双光賞を叙勲されたお祝いを併せて行いました。



思いは一つ — SAVES LIVES —

臨床研究所 技幹 山田 六平

4/5 ~ 4/11 まで Washington D.C. にて開催された AACR (American Association of Cancer Research) annual meeting に参加した。折しも桜が満開で会場近くの National mole やスメソニアン博物館周辺は多くの観光客で賑わっていた。この桜は約 100 年前に日本から寄贈されたものであり、日本からの参加者は日米両国で満開のソメイヨシノを楽しむことができたことになる。

学会参加の最大の目的は、がん研究の最新の知識を得ることである。この学会が発信する研究成果は世界のがん研究をリードするもので、今年は特に cancer metabolism のセッションに多くの聴衆が集まっていた。海外学会参加のもう一つの目的は共同研究者との meeting である。あらゆる連絡がメールで事足りるようになった昨今であるが、お互いの研究の情熱を伝え合えるのは、文字通り「膝を突き合わせて」の discussion でしかない、と思う。そんな hot discussion のあとのガソリン (= ビール) 補給も至福の時であり、ここ D.C. ではそのような「給油所」に不自由しなかった。

タイトルは正確には Cancer research SAVES LIVES - で、これは参加者に無料で配布されるバッジに書いてある。人種も文化も違う世界中の研究者が「がんを治す」というたった一つの目標に向かって集まるパワーとその崇高さには感動すら覚える。

一方でその英知を結集しても未だ完全に打ち負かすことができない「がん」というこの難敵に畏怖を感じつつ、この使命に挑戦できる権利を与えられたことの幸福をかみしめている。



「第26回県民のための公開講演会」 が開催されました

臨床研究所 主任研究員 菊地 慶司

4月18日の発明の日を含む一週間は、科学技術について広く一般の方々に理解と関心を深めていただき、日本の科学技術の振興を図ることを目的とする「科学技術週間」です。この期間に全国の各機関で科学技術に関するさまざまなイベントを実施することになっていますが、がんセンターの臨床研究所では例年、がんに関わる最新の研究成果や診断・治療の技術を県民の皆様に紹介する講演会を開催しています。

今回の講演会は「新たながん放射線治療への挑戦」というテーマで4月17日（水）に二俣川の旭区民文化センター（サンハート）ホールで開催されました。このテーマは11月にオープンする新がんセンターでは全国で5番目となる重粒子線治療装置が導入されることとなっており、県民の皆様のがんの放射線治療への関心が高まっていることを背景に選定されたもので、4人の病院の先生方に講演をお願いいたしました。

第54回科学技術週間参加行事
神奈川県立がんセンター臨床研究所
第26回県民のための公開講演会

新たながん放射線治療への挑戦

日時：平成25年4月17日（水） 14時～16時35分
会場：横浜地区民文化センター「サンハート・ホール」
（相鉄線二俣川下車 徒歩2分 二俣川ライフ5F）

- 高精度放射線治療の展開～重粒子線治療開始に向けて～
放射線腫瘍科 部長 中山 優子
- 放射線治療で切らず治す
頭頸部外科 部長 久保田 彰
- 前立腺がんに対する小線源治療
泌尿器科 部長 岸田 健
- 子宮頸がんの放射線治療
婦人科 部長 加藤 久盛

入場無料（事前申し込みの必要はありません）
駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください

【主催】 地方自治体連合会 神奈川県立がんセンター
【共催】 放射線腫瘍学会 がんが健康財団
神奈川県立がんセンター

問い合わせ先 神奈川県立がんセンター企画調査室
TEL (045) 391-5761（内線2510）

放射線腫瘍科の中山部長には「高精度放射線治療の展開～重粒子線治療開始に向けて～」という題で新がんセンターでの放射線治療の陣容、重粒子線治療をはじめとする最新の技術の紹介をしていただき、新がんセンターでの放射線治療体制が世界に誇る「放射線腫瘍センター」となる展望を語っていただきました。婦人科の加藤部長には「子宮頸がんの放射線治療」の題で子宮頸がんがどのようなものであり、どのような場合に放射線治療が使われるのかを解説していただきました。泌尿器科の岸田部長には「前立腺がんに対する小線源治療」の題で、がん放射線を発する微細な針をさしこんでがんを死滅させる治療法（現在がんセンターでは行われていませんが、将来的に導入が予定されていること）を紹介していただきました。頭頸部外科の久保田部長には「放射線治療で切らず治す」の題で、患者さんのQOL（生活の質）を考慮した放射線と抗がん剤を併用した治療の進歩について、その効果と副作用についての解説とともに、治療法を選ぶ上で患者さんの指針となる考え方をお話していただきました。

講演会に来場された方は194人でした。アンケート結果を拝見した限りでは9割以上の方から好評をいただき、また質問の時間には多くの質問をいただき、来場者の皆様が放射線治療に大きな関心と期待を持っておられることを実感させていただきました。ご来場下さった皆様、演者の先生方と赤池総長をはじめご協力をいただいた関係者の方々に感謝するとともに、今後もこのような講演会を通して県民の皆様にがんの最新情報を的確にお伝えしていけるよう臨床研究所も努力して参ります。

検査データシリーズ

検査データについて

心臓関係検査、膵臓機能検査、鉄代謝検査、糖代謝系検査、その他の検査



今回は肝機能検査に引き続き第2弾として様々な検査を取り上げました。参考にして下さい。なお基準範囲は神奈川県立がんセンターで用いているもので、検査法の関係で他院とは一致しない場合がありますのでご承知おきください。（検査科部長 丹野 秀樹）

○心臓関係検査○

略称	項目名	当院基準範囲	単位	解説
CK	クレアチンキナーゼ	♂38～174 ♀26～140	U/l	CKは筋肉や脳に多量に存在する酵素です。筋細胞が破壊されると血中に増加します。

○膵臓機能検査○

略称	項目名	当院基準範囲	単位	解説
AMY	アミラーゼ	45～150	U/l	唾液や膵液に含まれる酵素です。唾液腺や膵臓が障害されると血中濃度が上昇します。

○鉄代謝検査○

略称	項目名	当院基準範囲	単位	解説
Fe	血清鉄	♂40～165 ♀30～150	μg/dl	主に赤血球や筋肉・肝臓・脾臓に含まれ、それらが障害されると血中に増加します。また、貧血や食事からの鉄分が不足すると低下します。

○糖代謝系検査○

略称	項目名	当院基準範囲	単位	解説
Glu	グルコース	70～109	mg/dl	血液中の糖分(ブドウ糖)を測定する検査です。
HbA1c	グリコヘモグロビン	4.6～6.2	%	赤血球中のヘモグロビンのうち、ブドウ糖と結合しているヘモグロビンの割合を調べる検査です。過去1～3ヶ月の血糖の状態が分かります。

○その他の検査○

略称	項目名	当院基準範囲	単位	解説
CRP	C反応性蛋白	0.0～0.3	mg/dl	炎症や組織の破壊などが起こったときに血中に増加します。他の検査と合わせて病気の重症度・経過・治療成績などを判定できます。





乳がん検診の目的と意義

A 8 病棟

乳がん看護認定看護師 瀬畑善子

現在、わが国の乳がん罹患率は年間約 60,000 名で、年々増加し、女性臓器別では第1位となっています。また、女性の約 15 名に 1 名が乳がんにかかるとされています。さらに、今後はその数も増加すると予測され、15 年後には現在の 1.5 倍になる勢いといわれています。

乳がん検診の目的は、「早期発見および乳がんによる死亡率を減少させること」です。アメリカやイギリスで

は、検診が普及することで死亡率が減少していますが、日本では残念ながら検診率が低いのが現状です。

乳がんは、早期発見をすることにより、9割以上が治癒する病気です。

乳がん検診は、ガイドラインでは、40歳代：マンモグラフィー2方向＋視触診、50歳代以上：マンモグラフィー1方向＋視触診(2年に1度)となっていますが、20歳ころから自己検診を行うことが望ましいです。乳がん罹患した患者さんも、反対側の乳房検診を継続していくことが大切となります。まずは、自己検診から始めましょう。

乳がん看護認定看護師の役割のひとつとして、乳房検診法の指導があります。また、乳がん患者さんに関わる医療者として、乳がんの早期発見の啓発に今後も関わっていきたくと思っています。

乳房自己検診の方法

1. 上半身を鏡に映し、両手を上下させて、左右の乳房の動きや形の変化(くぼみの有無)を見ます
2. 指をそろえて優しく乳房を触りながらしこりがないか確認をします
3. 乳頭から血液の混じった分泌物がでていないか確認をします
4. 仰向けになって外側から内側へ指をすべらせてしこりがないか確認をします
5. 乳房の手術後の人は、創部の観察を行います(赤くなっている、硬さが増しているなど)

乳房自己検診の時期

- ・ 閉経前の人は、月経後1週間くらいのあいだに行うと良いでしょう
- ・ 閉経後の人は、毎月日にちを決めて行いましょう

ボランティア会ランパスによる患者さんのための 6月木曜ミニコンサート予定表

時間：PM1:30～2:00(30分前後)

6月6日	ピアノ	小林 朋子
6月13日	声楽	福井 早枝子
6月20日	声楽	奥山 千賀子
6月27日	フルート	吉野 裕子

平成24年度 1月・2月・3月

および平成25年度 4月

1日平均患者数

(単位：人)

区分	1月	2月	3月	平成25年度 4月
入院	306.3	336.3	326.5	317.3
外来	744.5	734.2	761.8	741.4

編集後記

天候不順と思いきや、あっという間に新緑がまぶしい季節になりました。総長、病院長をはじめとして、病院トップ集団にも新たな時代を感じさせる異動がありました。2013年の話題は何と言っても新病院への移転です。『新しい酒は新しい革袋に盛れ』という格言にあるように、古い体質に固執せず、新たな考えで新たな医療サービスを始める絶好の機会です。患者さんのための「新がんセンター」をみんなで考え、「いつ変わるの?」という問いには、職員一同「今でしょ!」と笑顔で答えられる病院を目指しましょう。(企画情報部長 金森平和)

編集・発行：神奈川県立がんセンター 企画調査室

〒241 8515 横浜市旭区中尾1-1-2

TEL 045-391-5761 (内線2510)

http://kcch.kanagawa-pho.jp/